

正雄君と行雄君の手を引いて安全な所への出発である。

五常で暴徒に襲われての闘いは全く地獄化した日本人の醜状、言語に絶するものがあつた。

九月十四日、日本人の引揚げの決定通知をうけたときの喜びは正に生気をとりのどした。

吉林から新京を経てコロ島から博多港に上陸。十月二十八日無事、故里の家に帰りついた。

文字さんは開拓士の御主人を失つてから、一家の大黒柱となり、現地で亡夫の遺志を継ぎ活躍され、終戦後、母と三人の子供を引き連れて引き揚げて後、多くの辛酸を経て今日、富山県の福野町で平和な生活を送っている。

(社引揚者団体全国連合会)

副理事長 結城 吉之助)

満州開拓の夢破れて

岐阜県 奥 田 昭 吾

義勇軍志望の動機 昭和十八年四月、国民学校高等科の最終学年となつた私たちには、卒業後の進路を決定しなければならぬ時期であつた。

体の頑健な者はこぞつて少年兵志望であつたが、やせた体で体力も無い私には到底無理とあきらめていた。そんなある日、学校の図書室で一冊の本が目についた。それはB六版の小冊子で表紙には満蒙開拓青少年義勇軍と書かれ、内容は写真入りで義勇軍生活が紹介されたものであつたが、私はこの本によつて満州開拓の夢を見ることになつた。

その年の夏休みには満蒙開拓青少年義勇軍拓務訓練に参加し、広漠千里の大原野開拓の夢はますます強固なものとなつた。

私の家は、山間でわずかばかりの田畑を耕すかたわ

ら、製瓦業を営んでいた。父母に七人の兄弟と祖母の大家族で、戦時下の物資不足の中での生活は苦しく、長男の私には、地元農林学校に通わせながら家業を手伝わせるつもりの方は、私の義勇軍参加には反対であった。

当時の戦局は極めて厳しく、男はいずれ軍人として戦地に向いて、お国のために奉公することが日本国民の義務、と考えられていたので、戦地に行くのではなく開拓の仕事で奉公するのだからと説得して、両親に納得してもらった。

訓練生活

昭和十九年、国民学校卒業式も間近の三月十三日、全校の先生・生徒、並びに親族など多数の人に見送られて故郷を出発。十五日、茨城県内原の満蒙開拓青年義勇軍訓練所河和田分所へ入所、岐阜第四十四中隊・田中中隊として満州開拓の基礎訓練に入った。

三カ月の内地訓練予定が一カ月半ほどに短縮となり、五月七日に訓練所を出発。十五日に満州開拓青年義勇隊哈爾濱訓練所の第一中隊として入所、開拓地入植に

備えた現地訓練を二カ年の予定で実施することになった。

私は家畜に興味をもっていたので、厩舎当番を志望して馬の世話をするようになった。早朝未明からの仕事であったが、好きな馬と共に過ごす訓練生活は楽しいものであった。以後、馬耕班・本部厩舎当番と馬に関する仕事で一年が過ぎていった。

獣医研修生活

昭和二十年、酷寒の哈爾濱の冬もようやく和らぎ始めた四月に、奉天の副獣医養成所へ研修生として派遣していただくことになり、隣接千葉第三中隊の鈴木君と共に奉天市鉄西区の国立獣疫研究所副獣医養成所へ入所した。

あたかもこの四月初めには、岐阜第一中隊の五十人と千葉第三中隊の五十人が、戦時勤労挺身隊として奉天市皇姑区の満州車両株式会社へ派遣されており、同じ奉天市内に同輩の訓練生のいることは心強い限りであった。

この獣疫研究所は、家畜の胆疽病・鼻疽病・牛疫病

などの研究がなされており、研修一年目は実習が主に行われた。研究所内の屠殺場では、毎日屠殺業務が行われていたので、肉類は豊富で戦時下の食料事情としては申し分ないものであった。

終戦前後

研修生活もようやく慣れた八月十日ごろ、奉天駅西ガード付近にソ連機の爆弾投下があり、ソ連参戦を知らされた。不安であったが、日本の勝利を信ずる研修生には大きな動揺もなく、研修業務が続けられた。その後も二回ほどの空襲があり、伝令員として近くの鉄工場防空壕に設けられた警備本部に待機した。

十五日正午に重大放送があるということで、全員が一台のラジオを囲んで聞くことになった。玉音放送は雑音がひどくて聞き取りにくかったが、周りの者の話などから日本の敗戦らしいことが分かった。その日の午後は、全員何も手に付かない状態で茫然と過ぎてしまったが、翌日には早くもソ連兵が侵入して来たとの噂もあり、研究所で働く満人たちも集団で事務所へ押し掛けるなど、不穏な空気が高まってきた。

夜になって、奉天駅付近に群衆のざわめきが起り、一部に火の手が上がるなどするので、不審に思つて偵察に出ている同僚の話では、武装解除した日本軍の武器弾薬が貨車に積まれて駅に集められたのを、暴徒が全部持ち去つていくとのことであった。その夜から方で銃声が起り、銃弾がうなりをあげて飛び交うようになった。最初は恐ろしさで身もすくむ思いであったが、次第に音で遠近が判明できるようになり、怖さも薄れていった。

翌日からは、銃弾が宿舍の窓硝子を壊すようになり、何者かが私たちに挑戦していることがはつきりしてきたので、今後の行動を研修生担当の宮田教官に相談することになった。

私たちの宿舍は厩舎の二階にあつて、外部に設けられた階段で出入りするようになっており、私たち義勇隊研修生二十人に、指導員研修生三人が昨夜から合流していた。

宮田教官の官舎は研究所の近くにあつて、奥さんと幼児二人の四人家族で、私たちの宿舍から屋根が少し

見える程度の距離にあった。相談には指導員研修生一人と同僚二人の三人が出掛けていった。しばらくして満人の呼び声があるので、窓から外を窺ったところ、宮田教官と相談に行った研修生三人が後ろ手に縛られ、軽機関銃と小銃を持った二人の満人暴徒にうながされて防空壕の土盛りの上に座らされていた。暴徒は我々に向かって何やらわめいているが、何を言っているのかさっぱり分からない。

突然、研修生の一人が階段に向かって逃げた。続いてあとの二人も走り出した途端、軽機関銃と小銃を一斉に発射して暴徒は立ち去って行った。

一瞬の出来事であったが大変なことになってしまった。弾丸の一発は研修生の頭をかすめ軽傷であったが、宮田教官は防空壕の上につ伏せに倒れて動かない。早速、二階の宿舎に担ぎ上げたが、胸から腹にかけてものすごい出血である。皆が腹巻にしているサランを集めて二重三重にと巻き付けたが、噴き出る血は止めようもなく、病院へ行くこうにもこの険悪な治安では絶望的であった。

私たちは、今後の暴徒の襲撃に備えて、木銃の先に解剖刀を縛り付けて武器にし、外の階段を取り壊して入り口にバリケードを造って、最後までこの場を死守する覚悟を決めたのであった。

宮田教官は激しい出血のためか、顔面蒼白に変わり、目もかすんできたようであったが、苦しい息の下から、近くに日本軍の部隊があるからひとまず、そこへ行つて応援を求めよう指示された。私たちは、教官一人を残して置くのは心残りであったが、一刻を争う事態である。二階の宿舎から飛び下りて二メートルほどの塀を一気に乗り越え、日本軍の部隊の陣地に行つて宮田教官の救助を依頼したが、既にソ連軍の占領下にあつて聞き入れられないばかりか、かえつて私たちも拘束されてしまったのである。

その翌日、ソ連軍の使役として奉天駅近くの糧秣倉庫から米を運ぶことになり、大車を引いて部隊を出発した。日本兵五人が護衛してくれるというので、あるいは宮田教官のところへも行けるのではと希望を持ったが、糧秣倉庫についた途端、暴徒の一斉射撃を受け

て、弾丸が「ビシッ、ビシッ」と風を切って飛来する中で米袋を大車に積み、それに身を隠して部隊へ帰った。

この使役で、非武装で護衛した日本兵一人と同輩の滝沢君（兵庫県出身）が暴徒の弾をうけて即死した。それまで「満人暴徒に追われて逃げて来た腰抜け研修生」と侮っていたソ連兵も日本兵も、私たちの勇気を見直してくれた。宮田教官については、もはや命は無いものとおきらめてはいたが、せめて遺体の始末だけでもと思い、ソ連軍カピタンに外出を願い出て、許しを得られたのは二・三日後であった。

研修生十人ほどで、部隊に最も近い獣疫研究所裏口に行つたところ、以前に研究所で働いており、宮田教官の信頼も厚かった満人の陳さんが走り寄ってきた。

陳さんの話では「三日ばかり前、あなたたちはどうしているだろうとおもつて宿舍へ行ってみたところ、荷物などは全部持ち去られたあとに、宮田教官の死体だけが残っていたので、表の土俵の上に運びだして火葬にし、遺骨を預かっているのでお渡ししたい」と言

うことであつた。私たちは、あの満人暴徒とは違つた陳さんの温かい厚意に感謝し、部隊に伴つて皆でお礼をして遺骨を預かるとともに、宮田教官の家族の消息についてもお願いした。

後日、陳さんの案内で部隊を訪問して下さつたご家族の無事を喜び、涙ながらに教官を救出できなかったことをわびて、遺骨をお渡しすることができたのであつた。

ソ連軍の使役

私たちが拘束された部隊は日本軍の被服庫で軍服をはじめ、あらゆる装身具に毛布などが幾棟もの倉庫に保管されており、縫製工場や洗濯工場があつて器具設備も充実していた。部隊内には、ソ連軍兵士のほかに日本兵二十人ほどと、日本人男女軍属十人ほどが残留しており、私たちも含めた日本人はソ連軍の使役として、彼らが戦利品として本国へ輸送する物資の貨車積み作業をすることになった。

ソ連軍の下に朝鮮人の通訳がいて、朝夕の点呼を行い作業の指示をした。作業中はソ連軍兵士が自動小銃

を肩にかけて見張っており、「ブイストラ・ダワイ」といつて自動小銃を振り回し、私たちを仕事に急ぎ立てた。夜中には時々銃声が起こり、その都度、泥棒に侵入した満人ばかりか、ソ連兵までも射殺されていたので、危険な行動はしないようお互いに注意し合った。

四カ月ほどの使役作業の結果、全物資の輸送が終わったが、最後には構内に付設した鉄道レールまで引きはがして運び去る徹底ぶりであった。使役中の労働は厳しかったが、食糧が十分にあつたことと、部隊の施設を利用して、毎晩、入浴ができたことは不幸中の幸いであつた。

日本兵シベリヤへ旅立ち

ソ連軍の使役も十二月に終了し、日本兵は捕虜としてシベリヤ連行が伝えられ、ソ連兵の厳しい監視のもと、北陵方面に設けられた日本兵捕虜收容所へ一時、收容されることになった。私たち研修生は、部隊内に飼われていた軍用馬を連れて收容所まで同行することになった。思慮深い日本兵士から「收容所の門内には絶対入らぬよう、門外で馬を引き渡したら即刻立ち去

るように」と嚴重な注意をいただき、最後の「無事で日本に帰ってくれ」の言葉に、再び生きて祖国の土は踏めないかもしれぬ、という兵士たちの悲壮な思いがせつなく胸に迫つたのであつた。

日本兵士の中に岐阜県出身の人がいて、常々励ましの言葉をかけていただいた。いよいよ別れというときに「無事日本に帰国できたら、これを家族に渡してほしい」と写真に住所氏名を書いて預けられた。名刺入れにはさみ肌身放さず持ち歩いたが、うかつにも奉天市内で満人に取りかこまれて上着もろともはぎ取られてしまつた。今に至つて大変申し訳なく思うが、住所氏名はどうしても思い出すことができない。

挺身隊に合流

正月には部隊から出るようソ連軍の指示があり、研修生と軍属であつた人たちが四・五人のグループをつくり、三三五あてもなく市内へと散つて行つた。私と、千葉中隊出身の鈴木君の二人は、すぐにも中隊派遣先の満州車両株式会社へ帰りたいと思つたが、情報不明のため、ひとまず軍属の人の世話で、元日本軍

官舎へ入居することにした。使役の代償にもらった大きな荷物が目についたのか、すぐにソ連兵の家宅捜査に合い腕時計を渡して荷物の没収を免れた。

市内の治安もある程度回復したとはいえ、大きな荷物の持ち歩きは危険であることがわかったので、着替えの衣服を少しと毛布一枚を残して、ほかは全部売ることにした。一人で売買に出かけて満人に取り囲まれ、着衣まではぎ取られたこともあったが、荷物はまたたくまに売ることができた。

リュックサックひとつに飯盒の身軽な格好で、鈴木君と二人満州車両へと向かったのは一月も半ば過ぎであった。外は粉雪が舞っていたが、奉天の冬はさほど寒さを感じなかった。鉄西区の工場地帯は、窓硝子がほとんど無い建物が目立ち、取り壊してレンガまで持ち去った空き地の物陰に、助けを求めするように両腕を差し出したまま、凍り付いた死体があつて足もすくむ思いであった。

満人街皇姑屯^{こうこ屯}を無事通過して満州車両にたどり着き、ソ連軍の指揮下ではあるが、会社は稼働しており、訓

練生も働いていることを知って安堵した。

ここでも敗戦後に大きな暴動があり、暴民から会社を守った勇氣ある訓練生の行動を聞き、お互い無事であったことを喜び合った。その晩は、中隊長の家で高粱御飯の夕食を御馳走になりながら、敗戦の悔しさがどっとこみあげ涙が止まらなかった。

田中中隊長のお世話で、会社の石炭運びの仕事に従事することができ、会社の寮にも入居して、一応寝食を確保することができたが、入浴は思いにまかせず下着の着替えもなく、ましてや洗濯などは思いのほかで、着の身着のままの生活であった。

そのころ、引揚者收容所をはじめ私たちの間でも、発疹チフスが大流行しており、收容所では老人や子供が次々と死亡していることを聞いた。発疹チフスはシラムが媒体であるが、着の身着のままの私たちはシラムにとって良い住家であったのか、退治してもすぐまた取り付けてくるのには閉口した。病気の伝染を恐れて、ところ構わずシラム退治をした。

また、体が不潔であるので疥癬や皮癬といった皮膚

病が流行し、私も右腕内側に親指の頭がすっぽりと入るほどの穴があいて、その痛さは格別で腕のまがらないうこともあった。同僚の多数の者も腕や股間に穴をあけて苦しんでいた。「何か良い薬はないだろうか」と考えているうちに思い出した。

私が研修生のとき、獣疫研究所の薬品庫に綿羊の疥癬の薬があったことである。早速、同僚たちに話して休日には獣疫研究所へ行ってみた。建物は壊されていたが薬品があちこちに散らばっている。「あったぞ」私は、黄色い粉の入った瓶を拾い上げた。確かにこれだ、中国語の表示だが綿羊疥癬の字が読める。大喜びで持ち帰り膿のじむ病穴に粉をふりかけた。とたんに「ウツ、痛い」おもわず叫んで飛び上がったが、同僚も皆同じである。もうジツと我慢することはできない。「痛いッ・痛いッ」と叫びながら寮の回りを走り回ったのであった。二、三日すると病穴が乾き、だんだん小さくなって治癒していった。ほかの訓練生の中にも皮膚癬で苦しんでいる者があったが、あの痛さを思うと薬を分けてやる気にはなれなかった。

三月の終わりに八路軍の入城、続いて国民政府軍が入城して会社は政府軍の指揮下となり、四月には満十七歳未満者は会社解雇の指示が出されて、訓練生全員が職を失ってしまった。以後は、満人街に向向いて仕事を探す日雇い労務者となって、ある時には建築現場の土こね、次には鋳物工場の風車回しと食うためには重労働もいとわず働かなければならなかった。

そんなある日、私と同輩の二人で空腹を我慢しながら、早朝の満人街へと急いでいたが、小便がしたくなつたので道側の草むらで立ち小便を始めた。すると後ろでなにやら人声がするので振り向くと、国民軍の兵士らしい二人に取り押さえられてしまった。

「ここで小便をしてはいけない」と言う、私を待っていた同輩共々むりやり連行された所が公安隊本部であった。

これは困った。言葉が分からないので言い訳もできない。まさか立ち小便で銃殺まではしないだろうとは思ったが、深刻な状況であった。すると箒を持ってきて部屋の掃除をせよという、掃除が済んだら、こんど

はお茶を持ってきて皆に注いでまわれという、何のことはないボーイをやれというのだ。食べ物はくれたが賃金の話はない、立ち小便の罰というわけである。その夜は毛布一枚を借りて、椅子を並べてその上で寝た。公安隊員らが寝静まったので脱走のチャンスと思ったが、見付かつて銃殺されてはつまらないとあきらめた。

翌朝、掃除が済んだところで昨日の公安兵の一人が、私たちを伴って日本人住宅へと行った。ある一軒の家へやってきて私たちを押し込むようにして、公安兵も中に入った。家の中には奥さんと幼児がいて、部屋の隅でおびえている。公安兵は「この家に拳銃があるからそれを出せ」と言うのだが、言葉がさっぱり通じない。公安兵はいら立って右手の親指と人差し指を立てて、「バン・バン」と拳銃を撃つまねをしたので、奥さんはびっくり「命ばかりはお助けください」と涙をながしておられた。私たちもびっくりしたが、公安兵は銃を持ってこなかったはずである。ようやく意味が分かったので、奥さんに説明して、公安兵にはこの家に拳銃のないことを納得させた。次の家も、またその次の家

もと同じことの繰り返しである。もう嫌になったが、私たちがいなければ侵入された家の日本人も困るはずであったので、我慢して一緒に回った。公安兵がいないので、ふと横を見ると、道の向こう側へ行つて立ち小便をしている。「いまだ」二人は一日散に逃げた。道の角を回つて大通りへ出た。

「ここは駄目だ、見通しがきく」思わず叫んで側溝へ飛び込んだ。底は泥であったので、泥に潜つて首だけ出し、岸の草を頭にかぶつて一時間ほど隠れていたが、公安兵は帰ったのか探しにはこなかった。

しばらくの間、公安隊本部の方角は避けて仕事を探して歩いた。仕事にありつけない日は、一日中空腹を我慢しなければならぬ。病気にでもなれば死を宣告されたも同じであった。

今日も、夜の明けるのを待つて同僚たちは仕事にと出て行く。「オイ、仕事に行くぞ」私は、隣に寝ている友を揺りおこしたが、「今日は休む、頭が痛いから」と言つて起きようとしないので、額に手を当てるとすごい熱だ。昨日も休んでいるので、何も食べていない

はずである。私はその日の仕事を終えてから、饅頭を買って持ち帰り、友に勧めたが、いまは食べたくないと言うので、枕元に置いて寝てしまった。翌朝、目を覚ますと、友は既に冷たく帰らぬ人となっていた。

この異国の地で、だれに看取られることもなく、無言で旅立たなければならなかった友よ、明日は我が身かと、寂しさをこらえ合掌した。

私はこの日から、満人街の散髪店に住み込みでボーラー焚きの仕事を約束していたので、側にいた同僚に後を頼み宿舎を出て満人街へと急いだ。

飢餓との闘いは、私を無情の鬼とまで化していた。

引揚げ

五月の中旬になって、内地引揚げが始まるから、満人街に住み込みで仕事をしている者は居場所を報告するよう、中隊長の指示を伝え聞いた。飛び上がるほどの喜びで、ボーラーを焚くことも忘れて店主にしかるれながら、「日本に帰るので今日限りで仕事を辞める」と申し出て、渡る店主を納得させ、わずかばかりの報酬をもらって中隊長の元へ帰った。翌日から、二、

三人の同僚と共に満人街を回って訓練生を見付け次第、内地引揚げの近付いたことを知らせた。奉天駅付近にも足を延ばしたが、このころになって、ようやく北満から南下してきた日本人避難民が、ボロをまとい、やせ細った子供の手を引き、無言のまま一步一步と収容所に向かう一団に出会い、まさに亡霊を見る思いで胸が痛んだ。

昭和二十一年五月二十五日。引揚者第一陣として待望の奉天出発の日であったが、私はその二日ほど前に発熱し、激しい頭痛を伴って、引き揚げは無理かと思つたほどであったが、当日になって頭痛は治つたものの歩くのがやっとであった。

奉天駅から無蓋車に乗り、雨が降って大変だったと聞いたが、私は眠っていたのであろうか何も覚えていない。途中乗船待ちのため錦州で四、五日の野営が続き、昼間は皆が街へ散策にと出かけて行つたが、私は暑い日差しの下で毛布をかぶって横になっていた。幸い、引揚げのためにと中隊長が預かってくださり、出発のときに渡してくださったお金があつたので、満人

が野営所へ売りにきたゆで卵を大量に買い込み、食事の代わりに二、三個食べては、また寝る日が続いた。私と同じように一枚の毛布に寝ている親子三人がいたが、やせ細った子供には、支給された高粱飯はのどを通らないようであつたので、見かねて残っていた卵をやるとむさぼるように食べていた。この子供も私も、無事日本にたどり着けるのだろうかと心細い日々であつたが、卵で栄養補給ができたためか、乗船場所の口島に到着したときには体調も回復し、元気が出てきた。

口島では引揚者使役のための、力行隊を募ることになり、強健者で体の大きい者は強制的に参加させられたが、私はそれを免れ、停泊していた引揚船「興安丸」に乗船することができた。

もう安心である。興安丸は女界灘の大波に乗り快調に進んでいた。夜になって水葬があるというので甲板に出てみた。大勢の人たちが手を合せている。もしや錦州で会った子供ではないだろうか、あのやせ細った姿が脳裏をかすめ、ここまできての死は誠に残念で

あろうと、思わず合掌して冥福を祈った。

乗船してから幾日目であつたらうか、「日本が見えたぞ」の叫び声に皆が甲板へ飛び出した。波のかなたにかすかに陸が見える、近づくとつれて山のなだらかな線がはつきりとしてきた。岸壁の松が美しく目に染みる。ついにたどり着いた祖国日本は、敗戦後の苦しみ、すつきりとぬぐい去ってくれるように思える。私は夜のふけるまで本土の山を眺め続けた。

船室で目が覚めたときには、既に船は停泊していた。昨夜、舞鶴港に入港したとのことで、周りの者は荷物整理をしている。私もなけなしの荷物をまとめ、内地に着いたら着替えようと大切に持ってきた一枚だけのシャツを取り出して着替えた。うす汚れた古いシャツは捨てようかと、ごみ箱を探していた私の側へ、一人の引揚者が近付いて「そのシャツをいただけだろうか」と小声で言うので、見ればその人はシャツを着ていないようである。「シラミがいるかもしれないが、こんな物でよかつたら」と言つて古いシャツを渡すと、安堵した顔で大変喜んでくださった。

唇ごろになつて上陸し、頭から体の中まで白い粉を吹き付けられた。これが殺虫剤のDDTであることを後で知つた。支給された下着を着て顔や手を洗いさっぱりとした。

遠方の者は一泊して、翌日帰郷することになったが、時刻表を見て当日、高山線の最終列車に間に合うことを知り、列車に飛び乗った。岐阜駅で乗り換えるときには、駅前の焼け跡のバラックが目につき、わが家はどうかであろうかと心配になったが、降り立った故郷は少しも変わることなく私を迎えてくれた。

突然の帰郷に、家族は皆、茫然とするばかりである。久しぶりに母の心尽くしの食事を済ますと疲れが一度に出て、三日三晩、眠りとおした。

引揚げ後

波乱に満ちた満州生活、それは長い長い歳月に思えたが、たったの二年有余である。同級生の中にはまだ学生生活を送っている者もあった。

戦後の物資不足で大家族の我が家に生活の余裕はない。私は農業のかたわら馬を使って木材を搬出する仕

事についた。夜には、明日の仕事に履くわらじを作り、翌朝三時に起きて馬を飼い、五時には仕事に出るといふ単調な日が続いた。

翌年三月に学校教育制度の改革があり、その年に農林学校を卒業するはずの同級生の何人かが、新制高等学校の最高学年に編入した。このころから、私も何とか高校教育を受けたいと思うようになっていた。

昭和二十三年九月、益田高等学校定時制が開校されることになり、夜間部へ入学した。当初は、向学心にもえる勤労青年が多くいて、臨時に設けられた教室は満員となり、煙草の煙の立ち込める中で、ねむい目をこすりながらの勉強であったが、満州での生活を思えば何の苦勞でもなかった。

定時制高校の環境も逐次整備され、最初に入学した学生は二分の一ほどに減ったが、中学校から進学してくる学生も多くなり、私は生徒会長にも推されて生徒会事業を計画しながら、楽しい学生気分を味わうことができた。

四年半の勉強の結果、卒業できることになり、同窓

生の中には大学に進学した者もあって、定時制教育の成果が実証されたようで大変嬉しかったものである。

私は、力試しのつもりで受けた地方公務員の採用試験に合格していたので、近くの県立病院からの要請もあって、病院事務職員として採用されることになり、以後三十六年間、岐阜県職員としての本務を全うすることができた。

昭和五十三年六月と平成三年七月の二回にわたり、日中友好訪中団に加わり中国東北地方を訪問した。苦しかった満州も、今では青春のひと時を思い切り生き抜いた、懐かしい異郷の地と変わっていた。戦後の混乱のなかで、平和への夢もむなしく、異郷に眠る多くの拓友の霊に、心から御冥福をお祈り申し上げるものである。

【執筆者の横顔】

奥田昭吾氏は、昭和十八年四月に入り、郷土の国民学校高等科の最終学年となったが、学校の図書室で「満蒙開拓義勇軍」の写真入りの小冊子に、義勇軍生

活が紹介されていたのを読んでから、満州開拓をもつてお国のために奉公することを決意した。

奥田氏の家では山間部でわずかばかりの田畑を持って農業をする傍ら、製瓦業を営んではいたが、七人の子供と、祖母もいる大家族でもあることから少年時代の昭吾氏は、既に海外へ雄飛することを決心していた。

昭和十九年三月十三日、国民学校の先生、全校生徒、親族など多数の人に見送られて故郷を出発し、茨城県の内原訓練所で一カ月半の基礎訓練、五月七日内原を出発して渡満した。

満州開拓青少年義勇軍ハルビン訓練所に入所して入植に備えた現地訓練に入った。

昭和二十年四月に奉天の副獣医養成所に入所となつて研修生活中の八月十日、ソ連参戦を知らされた。八月十五日に玉音放送を聞くに及んで、日本敗戦とわかり茫然となる。その夜から方方で銃声が起こり、銃弾がうなりをあげて飛び交うようになった。

奥田氏らは、奉天の鉄西地区で、ソ連軍の使役に使われ、かつての関東軍の倉庫から戦利として、ソ連本

国へ輸送する物資の貨車積み作業が続いた。最後には構内に付設してある鉄道のレールまで引きはがして運び去る徹底ぶりであった。奉天で越冬して、翌二十一年五月、コロ島から日本へ引き揚げた。

波乱万丈の満州生活は、たった二年間であった。引き揚げてからも大家族の生活も容易ではなかった。昭吾氏も農業の傍ら馬で木材搬出の仕事に就いた。

その後、昭和二十三年九月、益田高等学校校定時制に入学し、四年半の勉学の後、卒業し、地方公務員試験に合格。岐阜県職員に採用となり、県立病院の事務職員として、爾来、定年まで三十六年間勤めた。堅忍不拔の士である。しかも訪中団に参加して日中友好の実をあげている奇特の人物である。

(社)引揚者団体全国連合会

副理事長 結城 吉之助)

敗戦の辛苦

岐阜県 山内 馨 夫

大正四年、岐阜県可児郡御嵩町に生まれた直後、父が御嵩町の小泉神社こいずみより岐阜伊奈波神社に転任になり、駒爪町に移る。さらに、父は伊勢神宮に転じたため、就学直前まで任んでいた岐阜より伊勢市へ移り入学した。大正十二年のことだ。またまた父は神宮司庁の京都支庁に換わり、京都九条小学校に転校、居を深草に変えたため深草小学校へと変わった。わずかな期間に三度も各県にわたって変わったため、方言によるいじめをうけた覚えがある。当時の神社界では、県社以上の神社の神職は、内務省神社局管轄下の各県の所管課の社寺兵事課より、辞令一枚で異動が行われ、全国的に動いたのである。

大正十三年に、先に渡満していた祖父(山内祀夫)が奉天神社宮司として、呼び寄せの形で辞令をもらい